

グラミン銀行プティア支店

モングラの港に戻ったわたしを待っていたのは、三十年前ぐらいに流行った角ばった車体のカラーラだった。ボディの塗装は剥がれ、ところどころ錆びている。何回も衝突し擦った車体の傷跡は癩癩を起した子供が殴り書きした絵のようだ。

ミランは「ホルタルの影響で、レンタカー会社が車を貸さないんです」と申し訳なさそうにいう。準備した車は個人所有のいわゆる白タクらしい。

わたしがこれから目指すラジシャヒは



インドとの国境近くに位置し、人口約七
十万人で国内第4位の大都市である。

周辺地域の土壌が桑の生育に適しているため養蚕業が盛んである。この生糸を使った絹織物、とくに絹サリーは、バン
グラデシュはもとより、他のイスラム文
化圏においても評判が高い。

また水はけがよく、果物栽培に適して
いるのでマンゴーやライチ（レイシ）な
どの栽培が盛んである。

ラジシャヒ管区は、野党の民族主義
党の党首であるカレダ・ジアとその夫の
出身地で、全国でも一番ホルタルが激し
い地域としても知られている。英字新聞
によれば、政府はホルタルに対抗するた
め、通信手段をすべて遮断した上で、ジ
ア党首を自宅に軟禁状態にした。これに
対し野党連合は「党首を餓死させようと
している」と猛反発し、無期限のホルタ
ルを宣言した。

さらに野党連合の一翼を担うジャマテ
イ・イスラミ党の幹部が、バングラデシ
ユ独立時に犯した罪によって死刑判決が
いいわたされ、火に油を注ぐ状態に陥っ



ているというのである。

街の様子を眺めると、不穏な感じも受
けないし、庶民は普通の暮らしをしてい
るように見える。街角の小さな商店や食
堂なども営業を続けており、リキシャの
運転手が道端に停めた車のシートでのん
びりと煙草をふかしたりしている。

しかし、ミランによれば、いつもより車の交通量がずっと少ないという。新聞には、収穫した野菜を首都圏に運べずに腐らせてしまったと嘆く農民の写真や、火炎瓶を投げられて炎上した長距離バスの写真やらが大きく掲載されているから、ホルタルの影響が出ていることは間違いない。

仕方がないので、錆びたカローラで最寄りの駅まで行き、列車でラジシャヒ管区の中でバングラデシユ北西部の最大の都市、ラジシャヒに向かうことにした。ラジシャヒは、バングラデシユ独立前はインドのベンガル地方の有力都市で、古い仏教遺跡やヒンドゥー寺院がある。

車と列車を乗り継ぎ、一日かけてたどりついたラジシャヒの町にも、借りられるレンタカーはなかった。ミランがなじみのダッカのレンタカー会社から車を回送させることも考えたが、急には間に合わない。古いヒンドゥー寺院のあるプティアという村はラジシャヒから二十五キロほどなので、そこを訪問する際はオートリキシャで我慢してくれという。

ミランが調達してきたのは、モーターとバッテリーを搭載した電気で動くタイプのオートリキシャ。千タカで一日貸し切りだ。オートリキシャは人力でペダルをこぐリキシャの発展型で、ダッカでは燃料として液化天然ガスを使うCNGが主流だが、ガススタンドの普及が遅れた地方都市は電気自動車タイプが多いよう



だ。変な所で日本より進んでいるんだなと感心した。

ホテルの玄関に約束の時間の三十分遅れでやってきたのは、がっしりとした体格の、いまが働き盛りの男。両頬から顎にかけてひげが濃い。ルンギにサンダル履きで運転に支障はないか気になったが、そんなにスピードが出る訳でもなからうと文句をつけるのはやめた。

ホテルの玄関に横付けされた車は、使い古してくたびれた感じは否めないが、ポルシェレッドに塗った車体には傷はない。今日一日、この車をポルシェと呼ぶことにした。バングラデシユに来てオートリキシャに乗るのは初めてなので、雑巾で座席を拭いている運転手に聞いてみた。

「これは会社の車ですか、あなた自身の所有の車ですか」

「親方から借りるんだ。親方は二十台ぐらい持っている」

「一日いくらで借りるんですか」

ドライバーは「高い」としか答えなかった。



「充電はどのくらいの時間がかかりますか」

「夜中に七時間で満杯だ」

「それでどのくらいの距離を走れるんですか」

「百キロは大丈夫だよ」

オートリキシャは最初はガソリンで走

っていたが、原油を輸入しているバングラデシュではガソリンは高い。次に普及したのが国産の液化天然ガスを使うCNG。いまではそれより安い電動式が流行だという。

「これは中国製ですか」

「モーターは中国製だが、バッテリーはバングラデシュ製だ」

「安全運転をお願いしますよ」

「いつも女房にそう言われている」

ミランの話では、オートリキシャにも公定料金があり、最初のニキロが二十五タカ、以後一キロごとに七タカと決まっている。しかし、メータが付いている車は少なく、付いていたとしてもほとんどが壊れているか、無視するかで、政府が決めた公共料金には誰も従わない。

ポルシェの後部座席は三人がけのシートが二列あり、向かい合わせに六人が乗ることができるといだが、大の大人が二人乗っても息苦しい。ミランには運席手の脇に座ってもらうことにした。

またこのポルシェには、ドアがない。

風が吹きさらしなのはいたしかたないが、

衝突事故でもあれば大けがになる危険性が高い。

バングラデシュでは、過積載のトラックや整備不良の車が多い。歩行者も車も交通規則を守らず、かつ渋滞も日常的なので、交通事故が多発している。ダッカ市内ではリキシャに車が追突してけが人が出た現場に遭遇したし、トラックが郊外の道路で横転しているところも見た。

庶民の足であるリキシャやオートリキシャはホルタルの標的になることは少ないとミランから聞いていたが、ホテルで見た新聞には、火炎瓶を投げられて炎上するオートリキシャの写真が掲載されていた。まさか白昼、衆人環視の中で犯行に及ぶとも思われないが、渋滞などで車が止ったときに歩行者が近づいてくると気が気ではない。三十分ほど走ってようやく市街から抜け出し、人通りも少ない田舎道になったときには、ほっとした。

今日はプティアのヒンドゥー寺院の見学のついでに、グラミン銀行の支店にぜひ立ち寄ってくれるように運転手に頼んでおいた。この地方はバングラデシュ



随一の果物の産地で、とくにマンゴーの生産は名高い。大都市近郊のドンドマ村や半農半漁のシュンドルボン周辺とは違った本格的な農業地帯でのマイクロ・クレジットの実情を見てみたかったのである。

農村部では、裕福な大土地所有者がいる一方、土地や資産を持たず、田舎ゆえに雇用の機会にも恵まれない世帯も多い

と聞く。彼らは大土地所有者の畑を借りて小作をしたり、季節的な農作業に雇われたりしているが、それだけでは家計を支えることができず、援助や公的扶助に頼るケースが多い。バングラデシュで三反歩以下の土地しか所有していない農家は全農家の六割に達するという。

日本で昔「三反百姓」といえば別名「水呑百姓」のことである。明治の後半から大正頃は、水田の反当りの収量は二百五十キロ程度しかなかった。ほとんどの百姓は小作で、収穫の四十パーセントは地主に収める。自分の取り分は反当たり百五十キロで、年間一人当たりの米の消費量と同じだ。単純計算では三人しか食べない。米だけ食っている訳ではないので、生活を維持することはおぼろしく、男の子は奉公に出し、娘は時には娼窟に売らざるをえなかった時代である。

グラミン銀行プティア支店は、遺跡に向かう幹線道路沿いのマンゴーの林の中にあつた。銀行の支店というより、日本の感覚でいえば田舎の小さな特定郵便局といった感じに近い。建物は日本の普通



の二階建ての民家と同じような規模だが、田舎では立派な建物の部類に入るだろう。ダッカ近郊のシヨナルガオ支店を訪れたときは、午後の仕事が始まったもつとも忙しい時間帯だったため、迷惑がられて、

あまり話が聞けなかった。今回はまだ朝の早い時間だから、銀行のスタッフも少しは時間をとってくれるだろうと期待して扉を開けたのだが、事務所にはだれもいない。我々の声を聞きつけて裏から姿を現したのは掃除のおばさんだった。銀行のスタッフはまだ出社していないのかと尋ねると、全員がミーティングに出かけたという。

グラミン銀行のスタッフは、金曜日を除く毎朝、借り手の女性たちが集まる「センター」へ出向き、ミーティングを行い、返済金を回収する。そのことは、本社でモルシェット部長に会ったとき、聞かされていて、承知していたはずだが忘れていた。

「支社のスタッフはボロワー（借り手）の元に出かけ、相談に乗りアドバイスする。これがグラミン銀行のやり方です。事務所の中にいる社員は、仕事をしているとは認められません。事務所にいるのは融資のための一〜二時間にすぎないのです」と彼は確かに言ったのだ。スタッフがいないのであれば支社に

ても仕方がない。わたしも近くの「センター」を訪問して、ミーティングが開かれている現場を見てみたい。掃除のおばさんに「この近くにセンターはないか」と尋ねると、道路を挟んだ反対側の農道を十五分ほど歩いたところにひとつあるという。

ポルシェに乗って行こうとミランはい



うが、歩いて十五分なら村の雰囲気になじむのにちょうどいい距離だ。迷わず歩くことにする。マンガーの名産地といわれるだけあって、道の両側にも屋敷地の中にも、いたる所にマンガーの木が茂っている。

いままでいくつかの地方の農村を見てきたが、ラジャヒ地方の農家は比較的に豊かそうに思える。まず家屋の造りが違う。壁はレンガや漆喰、屋根はトタン屋根の家が多い。また雨季の洪水対策として、家の土台を盛り土したり、コンクリートでかさ上げしたりしている家も目立つ。電線も一部の家には引き込まれていた。

村の広場に面した一角にある雑貨屋兼駄菓子屋の軒先でたくさんの人が群がっていたので、覗き込んでみると店の奥に設置されたテレビを見るために集まった人たちだった。日本の昭和三十年代もこんな風景が各地で見られた。都市部では街頭テレビが設置され、プロレス中継や大相撲中継に観衆が殺到した。

わたしの育った山梨の農村部では、こ



こと同じように、まず駄菓子屋や電気店の店頭テレビが設置された。白黒の小さな画面だったが、多くの子供たちが画面を食い入るように店頭に立ち尽くしたものだ。

「センター」は、覆いかぶさるバナナの葉をよけながら、人ひとりがやっと通れるような小道を十メートルほど入ったと

ころにあった。大きな木の幹に「クティパラ・土地を持たない女性のためのセンター」と書かれたトタンの標識が打ちつけてあり、標識の真ん中にはグラミン銀行の「家の形」のロゴマークがある。クティパラはこの村の名前だ。グラミン銀行のグラミンはベンガル語の農村という



意味だという。農村こそがグラミン銀行のホームグラウンドなのである

まだ三歳程度の子供を連れた若い女性とその母親らしき女性が出したので、さっそく話を聞いてみることにした。

「センターでのミーティングは、今日はやらないんですか」

「ミーティングは火曜日の朝だよ。今日はないよ」

「あなたの自宅がセンターになっているんですか」

「センターはあそこ。グラミン銀行が建てたんです」

ナズマさんというこの女性は、彼女のうしろにあるトタンで四方を囲われた小屋を指さし、案内してくれた。センターは十坪ほどの簡素な建物だった。丸太を組んで、それにトタンを張り付けただけの造りだ。壁のトタンが全部を覆っていないのは、風通しを良くするためと採光のために違いない。

建物の中は土間だが、人が腰掛けられるように、三十センチほどの幅で何列か細長く盛り上げてある。



「ミーティングが開かれるときは、このセンターに何人ぐらいの人が集まるんですか」

「三十人から四十人ぐらいかな」

「全員がお金を借りている人ですか」

「借りている人もいるし、勉強のために来る人もいる」

「グラミン銀行のスタッフはどんな話を

するんですか」

「働け、働け、もっと一生懸命働けていつも言ってるよ」

ナズマさんは含み笑いを見せながら、わたしに小屋の隅にある椅子をすすめた。

自分は空になった肥料の袋らしきものを広げると、長椅子風に盛り上げた土間に敷き、腰を下ろした。母親らしき女性も一緒だ。

「ナズマさんはお金を借りているんですか」

「十六万タカ借りていますよ」

「えっ、そんなに貸してくれるんですか」

「五万ぐらいが限度だと聞いていますが」

「初めてじゃないからね。それにわが家は借家じゃなくて持ち家だからね」

「最初はいつ頃、いくら借りたんですか」

「最初は五年前に、八万タカ借りて、夫にオートリキシャを買ってやった」

「旦那さんの名義では借りられないんですか」

「男には貸してくれない。遊びに使っちゃうからね、それに、借りる前には毎週のミーティングにしっかり出なければ駄

目なんだ」

「なるほど。旦那さんははじめに働いて、お金はきちんと返せましたか」

「全部返したよ。だから、また借りられたんだよ」

「今度借りた十六万タカはなにに使ったんですか」

「他の人に貸し付けた」

「えっ、又貸しですか。そんなことができるんですか」



「土地を担保にお金を貸したのさ。全額返してもらうまで、わたしがその土地を耕作する権利があるんだよ」

グラミン銀行が、又貸しのための融資を本当にするのか、最初は疑問に思ったが、ナズマさんの話をまとめると以下のようになる。

ナズマさんの家は畑をまったく持っていないが、土地を貸したいという人が近所にいた。出稼ぎに行くのに必要な金を調達するためだ。ナズマさんは、その土地で豆や玉ねぎや生姜を栽培すれば、一年間で三万タカぐらいの利益が得られると計算した。もちろん耕作のために必要な種、資材、肥料などの必要経費も計算に入っている。

土地の耕作権はとりあえず二年間。十

六万タカも約二年間かけて返済する。毎週の返済額は二千八百タカ。夫のオートリキシャの稼ぎで十分返済可能だ。出稼ぎに出た人が帰って来て、全額返済してくれても、帰ってこなくて耕作権を持ち続けても借り入れ利息10パーセントなら損はないとふんだのだ。

農村社会の閉鎖的な慣習から、かつては女性が現金を手にすることはほとんどなかったという。収入は夫が管理し、買い物も夫がする。土地を持たない田舎の女性は、就業の機会もほとんどなく、家事労働に専念するだけだったという。

例えば、二〇〇一年に外務省専門調査員としてバングラデシュに赴任した榎本美樹は「バングラデシュにおける女性と子供の現状」というレポートで次のように述べている。

『農村で話を聞くと、自分の村もしくは嫁ぎ先の村から出たことがないという女性が多く、身内以外の男性にその姿を見られないように細心の注意を払う。例として、家の裏が池になっている場合には池の端に小屋状のものを建てて、その

中で入浴、洗濯、食器洗い等々を行う習慣がある。さらに有名なものでは、女性が外出する際、肌の露出を最小限に抑えるために、手首・足首・眼以外の体の部位を覆うためのブルカといわれる布をすっぽりかぶる習慣もある。これらは全てイスラム教の規定に準拠するもので、人口の90パーセント近くをイスラム教徒が占めるバングラデシュにおいて、これらの風景は日常である』

しかし、わたしが見聞きした限りでは「身内以外の男性にその姿を見られないように細心の注意を払う」ような女性にはお目にかかれなかった。ナズマさんのようなグラミン銀行のボロワーはもちろん、農村を歩いていて、わたしから身を隠そうとした女性はいない。「ブルカといわれる布をすっぽりかぶる」女性も目にしないことはなかったが、きわめて少数で、日常の風景ではなかった。

榎本美樹が農村の現場を踏まず、「農村の話聞いて」レポートを書いたのではと疑いたくなるが、彼女の見聞とわたし



の見聞との間には十五年のときの隔たりがある。この十数年でバングラデシユはそんなに変ったのであろうか。

少なくともナズマさんは、わたしと話をするのに、物おじするような態度はまったく見せなかった。借りた金についても、隠そうともせず堂々と答えてくれたし、返済のためのノートも自慢げに見

せてくれた。「旦那は返済のためのお金をきちんと持ってくるか」と聞いた時も、「母親とわたしが監視しているから大丈夫」と即座に答え、母親と顔を見合わせたのだった。

そこには「夫の従属物にすぎず、何の権利も持たない」という、従来からのイスラムの女性のイメージはまったくなかった。反対に、妻に尻を叩かれて必死に稼ぐ夫の姿を思い浮かべて、わたしは身につまされる思いさえしたのだ。

マイクロファイナンスが、ナズマさんのような向上心や事業意欲を持った女性をカづけ、貧困から抜け出すためのツールとして活用されていることは十分理解できた。ナズマさんは、これから子供を連れて畑仕事に行くというので、がんばってくださいと声をかけてセンターを後にした。

先ほど覗いたプティア支店には、そろそろスタッフが始めて来る頃だろうと、来た道を引き返し始めると、往路で道を聞いた家の庭から声がかかった。「お茶を飲んでいけ」といっているようだ。庭に



は十人ほどの男女が集まって立ち話をしている。わたしに声をかけてくれた女の子はまだ中学生ぐらいだ。

「こんにちは。学校は休みですか」

「いまは試験休みよ」

「学期末の試験？」

「いいえ、中学校の卒業試験。これから高校へいくの」

バングラデシュでは、中学校終了時に SSC (Secondary School Certification)、という全国で行われる試験に合格しなければ、中学校を卒業したとは見なされず、高校へも進学できない。この女の子はシェドさん、十五歳だ。

バングラデシュの女の子で高校へ進学するというのは、かなり裕福な家庭に限られる。シェドさんは一緒にいた両親や兄とそのお嫁さんなどモッラ家の面々を紹介してくれた。兄嫁は台所で昼食の準備をしていたようだ。母屋とは別に台所がある家は初めて見た。

シェドさんの父親はマンゴーやライチ、バナナなどを自分で栽培しながら、果物問屋も営んでいるこの地方では名士のよ



うだ。

いまは乾期で残念ながらマンゴーの季節ではない。マンゴーが熟するのは五月から九月にかけて。肉厚で甘みが強いラジシャヒのマンゴーは大人気で、全国に出荷されるようだ。シェドさんの父親によれば、ラジシャヒのマンゴーの木は百万本以上で、毎年十一万トンが収穫されるという。価格は一キロで百タカほど。日本では考えられないくらい安い。

ラジシャヒの風土がマンゴーに合っているのだらう。マンゴーの実を食べた後に種をその辺に投げて、土をちょっとかぶせておけば、すぐに芽が出るといふ。

「シェドさん、日本ではマンゴーは高いんですよ。このくらい（握りこぶし）のマンゴーが千タカぐらいしますよ」

「マンゴーはここではアムって言います。千タカ出したら両手で抱えるぐらい大きなカゴにいっぱいになりますよ」

「マンゴーは好きですか。ここではどんな食べ方をしますか。ジュースにしたリジャムにしたりしますか」



「もちろん大好き。ご飯と混ぜて食べるんですよ」

「トルカリに入れるんですか」

「違うわ。白いご飯に良く熟したマンゴーを入れて、そこに牛乳をかけて食べるよ、ちょっと贅沢なデザートみたいになっ
ておいしいのよ」

主食のご飯に混ぜて食べるといのは、さすがはマンゴーの本場だ。新鮮なうち生で食べるといのがバングラデシュ風なのだ。

マンゴーが日本の十分の一の値段だといふほど安ければ、ジュースやジャムにして輸出したらどうかと思うが、シエドさんのお父さんの言うのには、果物の加工工場がラジシャヒにはないという。マンゴー自体は非常に腐りやすい果物で日持ちがしない。もし加工して付加価値を高めることができれば、この地方の地域経済の発展に大いに役立つのではないだろうか。

モッラ家では男性よりむしろ女性の方が積極的に社交的だった。シエドさんがみんな写真撮ろうと、自分のスマホを持ちだすと、お父さんや兄さんは照れ笑いしながら後ずさりしてしまった。考えてみれば、この国の総理大臣も野党第一党の党首も女性なのだ。「女性は男性に従属し、庇護されるべき存在だ」というイスラムの女性観をそろそろ改めてもいい時期なのではなからうか。



お茶やお菓子をこちそうになり、マンゴー談義に花を咲かせているうちに、だいぶ時間が過ぎてしまったが、プティア支店の前に戻ると、ちょうどスタッフの一人がバイクで戻って来たところだった。朝方にはなかったバイクが支店の前にすでに四台停まっている。

いま帰って来たばかりのスタッフに急いで声をかけると、たまたま支店長のクマルさんだった。支店の活動状況を聞かせてくれと頼むと、これから休憩時間だから構いませんと快く応じてくれた。支店長席の前の椅子に座り、ノートを開いていると、副支店長のムハンマドさんも帰って来たので、二人から話を聞くことになった。

「つい今しがた、近くのクティパラというセンターを訪問して、ひとりのボロワーにお話を聞いてきたところです。あのようなセンターはこの支店の下にいくつあるんですか」

「この支店では十一人のスタッフで、九十五か所のセンターを運営しています」「貸付金の総額はどのくらいでしょうか」

「四六九五人に約七千万タカを貸しだしています」

この貸出額からいうと一人当たりの融資額は約一万五千タカである。

「十一人のスタッフで九十五か所のセンターを切り盛りするには、一人当たり九



か所を持たなければなりません。大変です
「すね」

「金曜日を除く週五日、毎日午前中にひとりのスタッフが二か所のミーティングに出席します。一か所のミーティングは約一時間ですので十分可能です。スタッフは返済されたお金を持って十二時まで

には支店に帰ってきます」

銀行の支店といっても、窓に細い鉄格子が入っているだけで、建物の造りは日本であれば普通の民家並みである。コンピュータの姿も一台も見えない。あるのは手のひらサイズの電卓だけ。いまだに、すべて手書きの帳簿で管理しているようだ

「回収したお金はどうするんですか。この建物の中にお金を置いておくのは心配じゃないんですか」

「回収したお金は、すぐに貸し出すから、支店には一タカも置いておきません。午後一時から女性たちがお金を借りに来ます。もし余ったら、よその銀行に預金してしまいます」

「すると金庫もないんですか」

「ありません」

貸出金利は平均で10パーセントと聞いた。しかし貸し出した翌週から返済が始まり、返済された金を再びすぐに貸し出すというのだから、実質的な利回りはもっと高くなる。

「クマル支店長、本店でも、ボロワーか



らも金利は10パーセントと聞いていました。いま気が付きましたが、銀行側から見れば10パーセントどころか、ものすごい利回りになるんじゃないですか。ちょっと、あくどくないですか」

「おっしゃる通り、10パーセントは複利ではありません。しかし話を簡単にする

ために、ボロワーたちには二万タカ借りた場合、返済するのは10パーセントの利息分を上乗せした二万二千タカと説明しています。実質金利は40パーセントぐらいになります」

返済された金を、そのまま金庫にしまっておいたのでは、とても40パーセントという高い利回りは得られない。少額の融資でもたくさんのボロワーに回転良く貸し出し、貸し倒れが少なければ経営は十分成り立つ。

逆にボロワーの立場に立ってみるとどうなるだろうか。経済成長とともに、自給自足の農村にも貨幣経済が浸透していく。その時、生きるのに精いっぱい安い賃労働にしか従事できず、「資本」の蓄

積ができないピンボー人は、いつまでも貧困から抜け出すことができない。スタートを切るための「資本金」を貸し出すこと、それがグラミン銀行の果たした役割だ。

そしてここが重要なところだが、経済が急速に発展しているバングラデシュでは10パーセントの利息を払っても、利益が出るビジネスがたくさん存在するということだ。「資本」をもとにリキシャを買えば、借りながら商売をしている時より、確実に利益が増すのである。「資本」で子牛を買い、育て、乳を搾って売ることは、小作で畑仕事に汗を流すことよりはるかに後に残るものが増えるのである。

シヨナルガオ支店の時と違って、プティア支店の支店長と副支店長とはじっくり話ができた。ちょうど昼食前の都合が良い時間に訪れたのが幸いした。しかし、スタッフも徐々に帰って来て回収した金の計算があちこちで始まっている。金を借りに来た女性たちの受け付けも始まった。

この辺が引き上げる潮時であろう。最



後に、支店長さんの月額給与をできれば教えてくれないかと、ノートを書き出したところ、勤続九年で三万八千五百タカ（約5万円）だと口頭で答えてくれた。バングラデシュでは高給取りの部類に入るであろう。



ヒンドゥー寺院とヤギ勉強会

世界遺産シュンドルボンの見物を除けば、なんの変哲もない田舎の村と、金を借りた女性の話ばかりで、面白くない、飽きがきたとおっしゃる読者も多かろう。今日は、古い歴史的な建造物があるプティアという村を訪れるためにオートリキシャを借り切って出かけて来た。いくらマイクロファイナンスや田舎の暮らしに興味があるといっても、この辺でバングラデシュの歴史的な遺産について簡単に報告しておこう。

わたしが泊まっているラジシャヒ市は、



パドマ河（ガンジス河）東岸の町で、たびたび洪水の被害に悩まされるが、そこから二十五キロ東に離れ、丘陵地帯にあるプティア村は洪水の被害の少ない所で、果樹・穀倉地帯として栄えて来た。またパドマ川西岸のインド領のムルシダバード（コルカタ以前のベンガル地方の首都）

やコルカタにも近く、物資の移動の中継地でもあった。

この地の利を利用して、プティア村を治世の拠点にしたのが、ラジシャヒ地方を治めた歴代の領主だ。「建物にはあまり興味がない」と旅行会社には言ったのだが、大きな沐浴池に囲まれて、静かにたずむ領主の館と古いヒンドゥー寺院群は、村人の日常生活に溶け込んでいて、「あなたが好むバングラデシュの日常風景そのものだ」という口車に乗せられて訪ねる気になった。

観光地といっても、日本のように土産物屋が軒を並べるにぎやかさはない。遺跡の入り口辺りは、駄菓子屋、雑貨屋、サリーの生地屋、リキシャの修理屋など村の人たちが日常的に出入りする店が軒を連ねている。通りでは、子供たちがサッカーボールを追いかけていたり、水を汲みに来た若い女や洗濯物を持った老婆が行き来したりしていて、どこにでもある田舎の村の風景が広がっている。

沐浴池にかかった橋を渡ると、すぐ左手に現れたのがシヴァ寺院である。高い



基段の上に建てられた一辺が二十メートルほどの正方形の建物で、中央に大きな尖塔があり、四隅にも小さな尖塔がある。中心の祭壇室に安置されているのは、黒い玄武岩でできた巨大なシヴァリング

(シヴァ神の象徴)である。

円柱状のリングを取り囲む丸いリングはヨーニと呼ばれる女性器の象徴で、リングがヨーニを下から貫く、性交した状態を示している。参拝者たちはこのヨーニの部分に白い牛乳を注いで祈るのだが、それは性交の愛液として崇められる。リングは力強い生命力と豊穡の象徴なのだ。

シヴァはヒンドゥーでは破壊神と位置付けられているが、破壊がなければ新しいものは生まれない。すべてを徹底的に破壊し、そして再び尽きることなく生命を生み出してゆくというこの世の原理を意味しているのだ。



ミランがこのシヴァリングは「世界の男性器」だということで、日本ではニメートルを超すものがあると言ったら驚いていた。長野の佐久の田んぼの中に聳える縄文の男根型石棒はわたしの身長より高い。生家近くの浅間神社境内にあるご神体のリングもリアルさでは負けていない。

次に案内されたのは大きな広場の奥に建つ領主の館。地元ではラジバリと呼ばれる。建物正面にはヨーロッパのゴシック様式を思わせるような太い列柱が人々を威圧するように並んでいる。

十九世紀末にこの地方の領主によって建てられたというが、十九世紀末といえば英国ではゴシック・リバイバル全盛の



時代だったので、これを反映したものでろう。しかし完全にヨーロッパ風にするには気が引けたのだらう、随所にインド風が感じられる。

時代はヴィクトリア女王を皇帝とするインド帝国の時代だ。インド大反乱（1858）を完全に制圧し、ムガル帝国にとどめを刺した英国は、東インド会社を解散して直接支配に乗り出す。

大英帝国はインドを植民地として支配するにあたって、インドの地方領主（ザミンダール）に土地の所有権を認め、代わりに租税を納める義務を課した。そのような租税制度はザミンダール制と呼ばれ、まさにこのベンガル地方で最初に実施されたものだ。農民から地代として吸い上げられた富は、英国に運ばれ、当時進行中だった産業革命の推進力となり、資本主義の発展を促すものになったのである。一方、地方領主も、農民から地租として納める以上の過大な地代を徴収し、差額を着服することによって、私服を肥やした。

実質的な権力を奪われ、英国という支

配者の命ずるままに農民から過酷な搾取を繰り返した富の蓄積の象徴が、この威圧的なラジバリなのだ。プティアの領主はベンガルで二番目に広い領地を所有し、一番豊かなザミンダールだったといわれるが、独立時にすべての財産は没収され、いまその子孫はインドで暮らしているという。

このラジバリに隣接するのが、プティア最大の見ものとの呼び声が高い大ゴ



ヴィンダ寺院である。ゴヴィンダはヒンドゥー世界でヴィシュヌと並んで人気の高いクリシュナの別名である。

屋根の中央と四方に五つの尖塔を持つスタイルはベンガル地方の寺院建築に独特のもので、「パンチャラトナ形式」と呼ばれるが、おとぎの国の建物を描いた絵本に出てきそうな不思議な形をしている

る。屋根の四隅が緩やかに垂れ下がっているが、これは雨が多いベンガルに適應したものだ。この地方の農家の葦葺屋根は、雨水が落ちやすいように屋根の四隅が垂れ下がっており、軒がゆるいアーチを描いている。この独特の形を寺院建築のデザインに取り入れたものだという。

建物はすべて赤褐色の煉瓦で造られており、どっしりとした趣きがあり、神殿にふさわしい威厳を感じさせる。案内板には「プティア領主のお后、ラニ・ボボン・モヒニ・デヴィによって、一九世紀半ば（1823—1895）に建設された」とあるが、赤褐色の煉瓦は日光による褪色も少なく、経年変化も感じさせず美しい。

わたしは建築様式などというものに関する知識はまったくない。しかし世界中を旅してきて、建築物というものが、必ずその土地の風土を色濃く反映しているものだということは分かる。したがって、わたしが建築物を見るとときに一番注目するのは、その建物がその地域の風土をどのように反映しているか、その風土にどれだけマッチしているかである。

住宅であろうと神殿であろうと、それを人間が造り、使う限り風土の影響を受けざるを得ない。そして風土の影響をもっとも受けるのが、建築材料であることは間違いない。

エジプトのピラミッドやインカ帝国の数々の石組、アンコールワットなどは、



石造文化の最たるものだ。日本の神社仏閣や古民家は、縄文、弥生から連続と続く木の文化の象徴である。

これに比べればベンガルは「煉瓦の文化」といってもよい。わたしは「バングラデシュに来て、石垣というものを見た記憶がない。大河の下流域のデルタ地帯は、石も砂利もない。

あるのは泥である。したがって建築には、この泥を焼き固めた煉瓦を組み立てて使う。建物の基礎に使う割栗石やコンクリートに混ぜる骨材も得られないため、煉瓦を砕いてこの代わりとしている。

大ゴウヴィンダ寺院でもっとも注目されるのが、壁面すべてを覆う装飾である。ラーマーヤナやマハバーラタなど壮大なインド叙事詩を題材とするテラコッタ彫刻で、繊細な職人の技には驚かされる。

ラーマーヤナやマハバーラタは、現代においても、絵画、彫刻、建築、音楽、舞踏、演劇、映画など多くの分野で、インドのみならず、古くからインド文化を取り入れてきた東南アジア一円に、深く



浸透し影響力を持っているが、物語の粗筋を知らないわたしには、これらの装飾が美しいとしかいえないのが残念だ。

ここまで書いてきてふと気がついた。赤褐色のことをベンガラ色ともいうが、ベンガラは「ベンガル」に由来するので

はなかるうか。そう思って辞書を引いてみると『ベンガラは土から取れる成分(酸化鉄)で紅殻、弁柄とも呼ばれ、語源はインドのベンガル地方より伝来したことからそう呼ばれている』と書かれているではないか。ベンガラ色は、ベンガルの大地の色なのである。

さて、外堀(沐浴池)に囲まれた後楽園球場ぐらゐの森の中に、大小いくつものヒンドゥー寺院が点在しているのだが、建物についてこれ以上語るのはやめにする。というのは、次の遺跡に移動するため、森の中の小道を進んでいたとき、日陰の地面に座り込んで何やら話し合いをしている数人の女性グループを見つけたからである。

「ミラン、グラミン銀行のミーティングかもしれない。声をかけてみてくれ」

女性たちとしばらくやり取りをしていたミランは、わたしのほうを振り向くと「ヤギの勉強会」だという。

「ヤギを育てて、乳を飲もうというわけか」

「バングラデシュではヤギの乳はあまり

飲みません。肉がみんな大好きです」

ヤギの肉は日本ではあまり食べない。沖縄のヒージャー料理が有名だが、わたしはヤギ汁の強烈な臭さに辟易したことがある。わたしがいままで食べた料理の中で一番臭い思いをしたのは韓国の木浦の食堂で出されたホンオフエ(洪魚膾)というエイ肉を発酵させたもの。一年間掃除していない公衆便所の便器にいきなり顔を突っ込まれたような臭いがした。

「バングラデシュでは、ヤギはどうやっ



て食べるんだ」

「トルカリですよ。スパイスを利かせたトルカリなら、ヤギの臭みなんかまったくありません。煮込み料理もわたしは大好きです」

「この女性たちは子ヤギを育てて、成長したら売るんだな」

「そうです。ヤギはラマダン明けの祝祭や犠牲祭（イード）には欠かせません。ダッカでは普段一匹一万タカのヤギがイードの時期になると二万タカや三万タカに跳ね上がりますよ」

イードは日本のお盆や正月にも匹敵する重要な年中行事で、今年はラマダン明けのお祭りが七月十七日から十九日、犠牲祭が九月二十四日から二十六日に開かれる。イードにはミランの家でもダッカ郊外にできる特設市場からヤギを一匹買ってくる。これでご馳走を造り、家族や友人と楽しむのももちろん、三分の一は貧しい人たちにも振舞うのだという。

「カワサキさん、ヤギ肉はごちそうなんですよ。村の人たちは普段は米と野菜ぐらいしか食べられません。脂身が多いヤ

ギ肉は冠婚葬祭やイードの時しか食べられません」

女性たちをさしおいて、ミランと二人でヤギ肉談義をしている間に、女性たちは立ちあがって移動し始めた。これから勉強会が始まるようだ。勉強会が始まる前に、話し合いの席でも一番積極的に発言していた背の高い若い女性に話を聞くことにした。

「これからヤギの勉強会だということですが、ヤギはすでに飼っているんですか」



「飼っている人もいますが、わたしはまだ。勉強会に何回か出ると、子ヤギがもらえるんです」

「育てたヤギはどうしますか」

「子供を産ませて売ります」

「勉強会ではどんなことを勉強するんですか」

「栄養のことや妊娠したときのこ

と・・・」

勉強会の会場は、立木に幔幕を張り巡らせ、地面に布を敷いただけの青空教室である。机と椅子がひとつだけあるが、これは講師用だ。

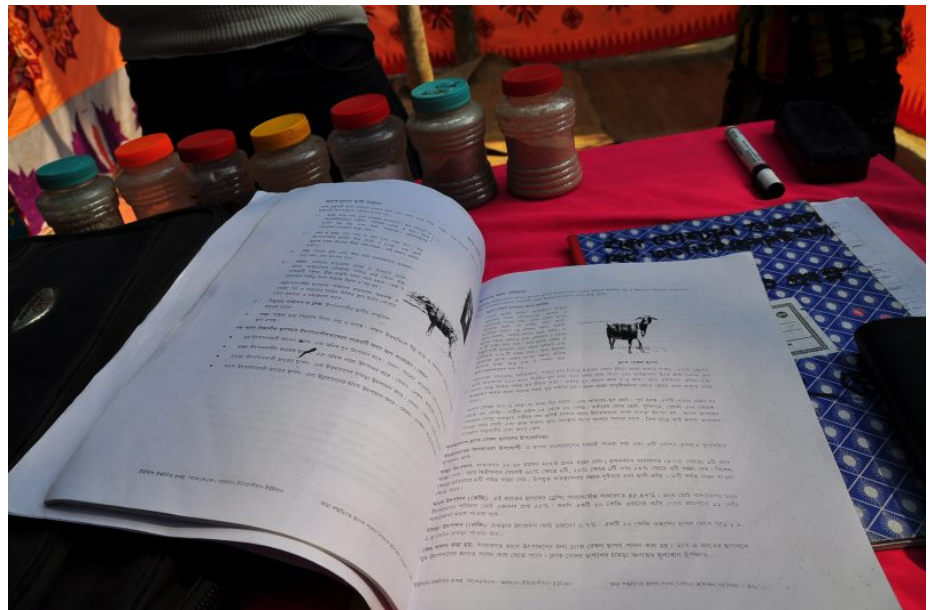
ちようと講師らしき若い男がバイクに乗って現れ、女性たちに声をかけると机の上に薬の瓶らしきものを並べ始めた。

「セミナーが始まる前に、ちよっとお話を聞かせてください。ヤギの飼育に関するセミナーということですが、どんな内容ですか」

「このセミナーはEUの食の安全計画というNGOがやっているもので、わたしはそのNGOのスタッフです。ヤギの飼育は決して難しいものではありません。女性や子供でも育てられます。しかし、その辺の草だけの飼育では、病気になったり成長が遅くなったりする問題があります」

講師は机の上に並べた壺をひとつ取り上げた。

「これはビタミンAです。これが不足すると皮膚病になったり、虚弱な子ヤギが



生まれたりします」

「その辺の草だけでは不十分なんです
ね」

「タンパク質、塩分、鉄分なんかも
する必要があります。放牧のほかに畜舎
でバナナの皮や豆類やキャッサバの蔓な
どを与えるように指導しています」

「さきほど女性から話を聞いたときに、

子ヤギを売るといっていましたが」

「ヤギは繁殖力が高くて、妊娠期間も五カ月ですから、一年ごとに倍々ゲームみたいが増えてゆきます。オスは肉用に、メスは繁殖用にすれば良い収入になります」

バングラデシュでは道路を犬がうろろしていることはめったにない。イスラム教では犬はブタと並んで不浄の生きものとされているからだ。預言者ムハンマドの言行録ハディースでは、犬の唾液は不浄とされ、体についたら七回洗うように指示されている。

これに比べればヤギがうろついているのはきわめて日常的な風景だ。ヤギは牛ほど高価ではないから、女性でも手に入れやすい。村の女性にとってヤギはライブストック（生きた資産）なのだ。

ユヌス博士と共にグラミン銀行を代表してノーベル賞の栄誉を受けたモサマ・タスリマ・ベグムさんのことを思い出した。彼女も一匹のヤギを飼うためにグラミン銀行から融資を受け、それを元手に貧しさから抜け出すことに成功したの

だった。マイクロファイナンスの融資を受けた女性たちが、最初に取り組む収入向上の手段として、ヤギの飼育は、育てるのにあまり手間がかからないため、人気があるようだ。育てたヤギが次々と子供を産み、それを売ったお金で牛を買い、その牛がまた子供を産んだというようなサクセスストーリーも耳にした。



バングラデシュに来てから、私は毎日ように多くの女性と会い、話を聞いた。

貧しい境遇の女性たちが多かった。その女性たちと会って、わたしが従来から持っていたイスラム女性観は完全に覆された。イスラム社会というと、一夫多妻制で、女性がヴェールをかぶり、行動が制限され、人妻は他の男性に姿をさらさないというイメージが強い。

しかし、わたしの会った女性たちは、異邦人の男性であるわたしに対して、身を隠すことはもちろん、物おじすることもなく、堂々と応対してくれた。マイクロファイナンスやNPOの助けを借りながら、なんとかかいまの境遇から抜け出そうという意欲にあふれた女性たちだった。彼女たちは「子供を学校へ通わせられることがうれしい」とか「わたしを無視していた義理の母親が、大事にしてくれるようになった」などと目を輝かせて語ってくれたものだ。彼女らは独立心が強く、社会の中で自分の居場所を見つけ出そうとしているように感じられた。

豊かなベンガル

バングラデシュは貧しい国だ、とわたしはこの紀行を書きだした。三週間近い旅を終えて、いまわたしが感じている素直な印象は、バングラデシュは貧しいが、豊かになる可能性を秘めた国だ、というものである。

その第一の理由は米を初めとする食べ物

の豊かさだ。主要農産物である米の収穫量は、2015年度で三千五百万トン。これは日本の四倍だ。日本の国土面積の四割弱の国土で、一億六千万人の胃袋を満たす米を生産できるといふことはたいしたものだ。これはバングラデシュが肥沃な土地と水と太陽に恵まれていることを意味する。

バングラデシュの米作りはもともと、お天気まかせ、洪水まかせだった。河の水が増水し、肥沃な土を含んだ氾濫した水が田んぼにもたらされると、田植えが始まる。うまく行くか否かはムスリムが良く使う「インシュアラー」（すべては神の御こころのままに）ということだ。



これに比べ日本の米作りは、夏の水不足と短い作期との戦いだ。灌漑はすでに弥生時代から始まっている。綿密な計画性と集団での共同作業が日本の米作りを支えてきた。

バングラデシユの年寄りと話をしていると、生産増強に必死に取り組んでいるような感じは受けない。良くいえばおもしろか、悪くいえば大雑把なのだ。しかし

若者たちと話していると明らかに変化が見られる。綿密な計画のもとで稲作に取り組むという機運が言葉の端々に感じられる。

ラジシャヒから古い仏教遺跡のあるパハールプールに向かう途中では道路の両側に広々と広がる水田に早苗が育っているのを見た。わたしが訪問した二月は乾

季で、雨がほとんど降らないが、灌漑水を利用してボロ稲という乾季作をやっているのだ。二月でも最高気温は二十七〜二十八度になるのだから、水さえあれば稲は育つ。

1980年代以降、稲の品種改良も着実に成果をあげているという。その代表が乾季稲作による生産能力強化だ。フィリピンにある国際稲作研究所(IRRI)より、高収量品種 IR-8 がもたらされ、農民からはピロップ（緑の革命）とよばれ、大きく生産力伸ばすことに成功した。

高収量品種、灌漑技術、化学肥料と農薬の使用の四点セットが緑の革命のメカニズムだった。これにより、それ以前の稲作に比べ、一年で単位面積あたりおよそ三倍の収穫ができるようになった。また、水資源を人間の手で管理するようになったおかげで安定的な収量が見込めるようになったのである。この緑の革命は急速に全国に普及し、人口増加率を上回る食料生産増加率を達成した。バングラデシユはいまや飢えから完全に解放されたといつてよい。

しかし、稲作がすべて高収量品種に置き換わったわけではない。昔から栽培されている在来品種も根強い人気があり、バザールに行くとき白い米、黄色い米、赤い米、小粒の米、細長い米など多数の米が売られている。値段も安い。一キロ四十タカ（54円）ほどだから、日本の十分の一の値段だ。

米の食べ方も多様である。バット（水



で炊く基本的なごはん)のほか、ポラオ（香辛料やバターで風味よく炊くごはん）、ビリヤニ（香辛料やバターを効かせ、なおかつ肉のカレーとセットで炊くごはん）、キチュリ（野菜や豆と炊くごはん）など、様々な食べ方を楽しんでいる。

主食としての食べ方だけではない。米の粉で作る菓子「ピタ」やミルク粥「パエシ」なども一般的だ。ご飯と果物を混ぜ合わせる食べ方は、プティアのマンゴー農家の娘に聞いた。

バングラデシュは「米と魚の国」なのだから、米の話だけでは片手落ちだろう。米の話をしたついでに魚の話もしておこう。車で移動中に、道路脇のため池でたくさんの子供が魚取りに熱中しているのを何度も見かけた。乾季の末期で、池にはほとんど水がない。子供たちは池の中に入り、泥まみれになりながら、魚を手掴みしてゆく。近くで見守っている大人たちも嬉しそうだ。捕れる魚はコイやナマズの仲間だ。

バングラデシュでは、道路や屋敷地は、周囲の土を掘り返し、その土を盛り上げ



て造成する。毎年のように発生する河川の氾濫から守るためだ。そのため屋敷地や道路の脇は窪みができ、そこに雨期の水がたまると池になる。コイやナマズは川が増水するのを待って、産卵するが、この受精した卵は増水した水とともに池にも流れこみ、孵化し、成長する。

魚は捕りつくしても、翌年の同じ頃に

はまた捕れるというわけである。

村の住人や道路工事によって作られた何十万もの池が全国に散らばっている。自然に任せていても魚が育ち、村で分け合うほど捕れるのだから、科学的な養殖を試みれば、さらに収穫は上がるだろう。

国際農業食料機関（FAO）の統計によれば、養殖漁業でバングラデシュは、過去十年継続して世界のトップ5以内の地位を占めている。2006年にはインドを上回り、世界二位になったこともある。

バングラデシュの漁獲量はこの十年間で53パーセントも増加した。一方バングラデシュ統計局の最新の経済統計によると、2015年度の三百四十五万トンの漁獲高のうち、養殖魚が約二百万トンを占めている。稚魚の保護など様々な対策の結果、国内で一番人気の高いイリシユの収穫量は三十五万トンに達した。

それでもまだ乾季末期の持つ養殖漁業の潜在的な可能性が生かしきれているとはいいいがたい。政府がもし養殖漁業により本腰を入れれば、バングラデシュは世界で一番の魚の生産国になれるかも知れ



ない。

野菜や果物も豊富だ。朝の市場を覗けば、新鮮な野菜が次々と運びこまれてくる。雨季が果物の季節とすれば、十二月から四月ごろまでの乾季は、野菜の季節だ。野菜のことをショブジーというが、これはベンガル語で緑を表す言葉だ。

写真は朝の野菜市場の様子だが、ラウ（夕顔）、フルコピー（カリフラワー）、ジュウロクササゲ、ベグン（なす）、コラル（苦瓜）、トマトなど日本でもおなじみの野菜が並んでいる。

乾季に野菜が豊富なのは雨季に比べて涼しいということもあるが、農家が米作



りの合間に換金作物として畑や庭先などでいろいろな野菜を育てるためだ。近くの農家が野菜を満載したかごを天秤棒で担いでやってきたり、背負いかごで運んできたりする。流通機構やコールドチェーンが未発達なバングラデシュでは、朝取りの野菜をその日のうちに消費するのが基本。いずれもみずみずしく新鮮だ。

二月は乾季の末期で果物はあまり豊富ではないが、棗（なつめ）はこの季節が旬だ。ラジシャヒからパハールプールへ向かう国道脇の広場では市が開かれている。梅の実のように硬くて酸味が強くあって、あまりおいしいとは感じられなかったが、バングラデシュでは人気の果物らしい。暑い国なのでこの酸味が清涼感を呼ぶと喜ばれるという。生で食べるほかにアチャールと呼ばれるピクルスにしてカレーなどに添える。

バングラデシュの未来への可能性の第二の理由は、その人口である。一億六千万人という人口規模は現在、世界第八位の大きさである。現在も年率1.4パーセント程度の人口増加を保っており、二〇三



〇年には二億人、二〇五〇年には三億人を超えると予測されている。

経済界では世界の工場として注目を浴びて来た中国からの脱出の動きが活発化している。中国の人件費急騰、人民元高、若年労働力の不足が主な原因だが、中国の社会不安、政治リスクも他のアジア諸

国への生産拠点分散につながっている。候補になっているのはタイ、ベトナム、インドネシア、インドなど多数あるが、ここに来て注目されているのはバングラデシュだ。

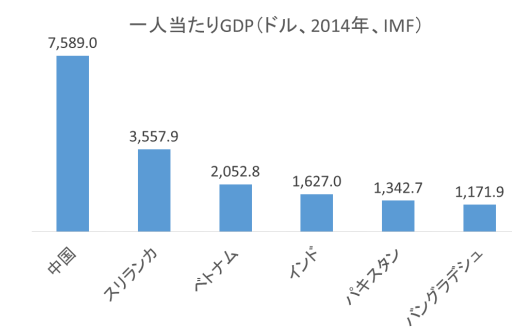
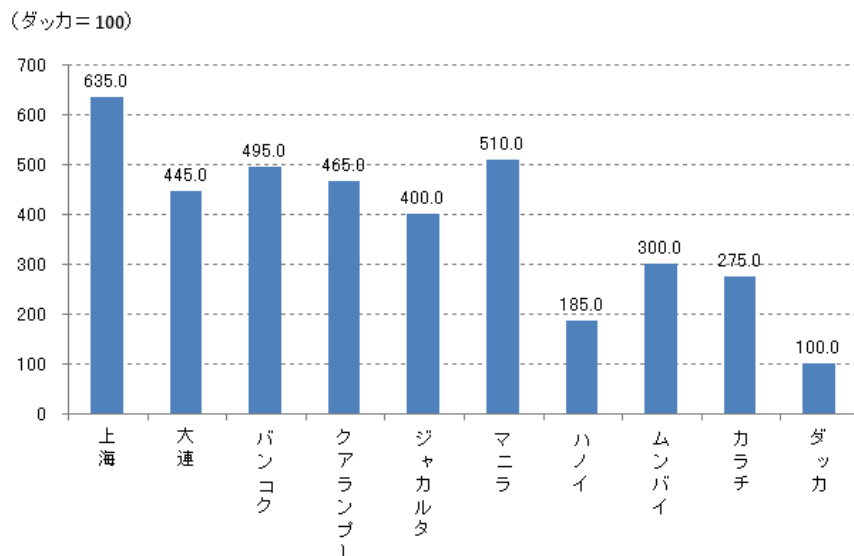
最大の魅力は人件費の安さだ。生産ラインの作業員の月収は五千円から七千円程度。中国の沿海部ではすでに三万円前後に達しているから、製造業にとっては大きな魅力だ。ベトナムやインドネシアなどに比べても安く、一定のインフラと秩序のある国では世界で最も賃金が安い国になっている。

イスラム国家だが、イスラム教への帰属感以上にベンガル人としてのアイデンティティーの方が強い。イスラム原理主義が跋扈し、不穏な動きを見せる昨今のイスラム社会において、バングラデシュが、穏健かつ安定したイスラム教国として体制を維持できていることは高く評価できるだろう。

バングラデシュは隣のミャンマーと並んで「ポスト中国」の輸出型製造業の受け皿国家としてこれから急成長するだろ

う。若年労働力の厚みと賃金水準のふたつの観点で、外資にとっての進出好適地はそんなに多いわけではない。

大きな人口は労働力の供給という面で有利なだけではない。安定した働き口がなかった国で外資が雇用を生み出した時、その職を得た若者が懸命に働くのは万国共通だ。かつての日本の若者も「モーレツ社員」とか「働き蜂」とか言われたで



はないか。若者たちが所得を増やすに従って、家電製品や自動車、住宅などの消費者になって行く。バングラデシュは巨大で魅力的な市場となってゆくだろう。

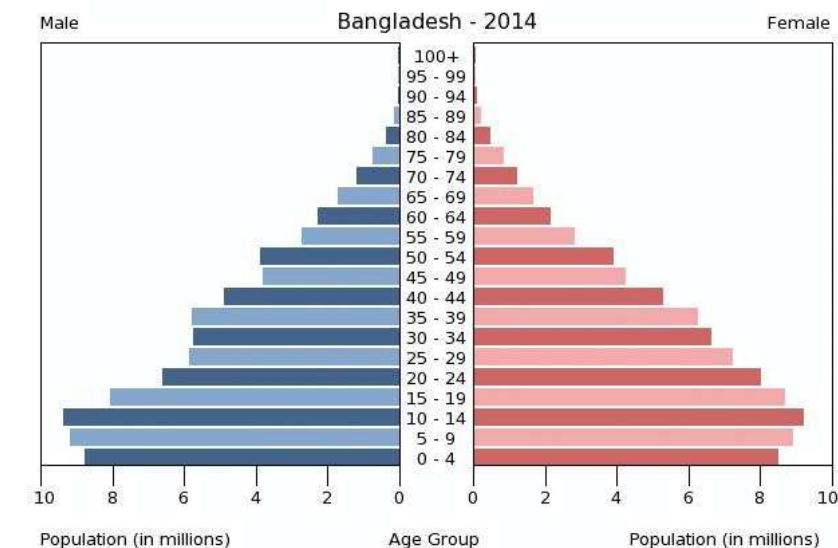
いまでも一億六千万人の人口のうち、三千万人が消費市場に参加しているといわれており、サービス業の発展を支えている。産業構造が第一次産業から第二次産業、第三次産業へと高度化する中で今後、大規模な内需の拡大が期待できる。

バングラデシュの貿易収支は赤字だが、経常収支は黒字で、外貨準備は増加している。それは中東などへの出稼ぎ労働者からの送金があるためだ。二〇〇九年度の貿易赤字五十六億ドルに対して、出稼ぎ労働者からの送金額は百十億ドル。貿易赤字の倍の送金が海外からあるという現実がある。

今後は国内での所得の増加と消費の増加が連動

ぎ労働者からの送金額は百十億ドル。貿易赤字の倍の送金が海外からあるという現実がある。

今後は国内での所得の増加と消費の増加が連動



する形になり、巨大なマーケットが形成されるだろう。

この見方を支えるひとつの理由が、その人口構成である。中国は「一人っ子政策」で二十五歳以下が人口の36%しかない一方で、バングラデシュは54%もいる若い国なのだ。人口の三分の二を占める二十歳以下の人口が、これから三十代、四十代になり、消費を支えることは間違

ない。

消費市場としての魅力は、バングラデシュ国内だけではない。バングラデシュはインド、パキスタン、スリランカ、ネパールなどを合わせた十六億人の市場に隣接し今後、需要が拡大する十億人市場のアフリカや購買力の高い中東市場へのアクセスもいいからだ。輸出生産拠点としての潜在力は高い。

外資を誘致しようと必死になっているバングラデシュにとって最大のネックはぜい弱なインフラであろう。中国などに比べて日本企業の進出が少ないのも、そのあたりに原因があると思われる。高速道路はなく、鉄道なども安定的な運用ができていたとは言い難い。電力は常時不足し、クリーンな淡水の確保にも苦労がある。

しかしこれらの課題は、途上国が工業化する過程で、かならず直面する課題だ。今後、インフラを先行整備した経済特区（SEZ）や工業団地が増えればそうした問題も次第に解決に向かい、外資の進出は爆発的に増えるだろう。

バングラデシュの未来への可能性の第

二の理由は、その地政学的な位置である。バングラデシュは東南アジアからインドに抜ける要衝にあり、地政学的に重要な役割を果たす国なのである。いまこの地域を巡っては、中国の「真珠の首飾り」戦略と日本の「ダイヤモンドの首飾り」戦略が激しくぶつかっている。

中国の「真珠の首飾り」戦略とは、中国が確保・構築しようとしているシーレーン戦略を指す。シーレーンと要衝（港湾等）を結ぶ図が首飾りのように見えることから、このように呼ばれている。シーレーンは、スリランカ、バングラデシュ、パキスタン、モルディブ、ソマリアだけでなく、戦略的 choke point（細かい海峡や、航路が集中する要衝）であるマラッカ海峡、ホルムズ海峡、ロンボク海峡などを通っている。中国の経済発展に欠かせないエネルギー資源の対外依存度はこれからますます高まっていくと予測されるが、重要なエネルギー供給先である中東やアフリカからの輸送路の安全を確保するという安全保障上の意味を持



っている。すでに空母を就役させ、バングラデシュやパキスタンといったインドの「庭先」に自国艦隊が利用できる港湾施設も建設した。

この戦略は、習近平が唱える中国の大戦略「一带一路」と当然結びついている。

「一帯一路」とは、陸上のシルクロード経済ベルト「一帯」と二十一世紀の海上シルクロード「一路」を意味する。アジアから欧州に至る巨大な経済圏を中国の手で作ろうというものだ。いま話題のA—B（アジアインフラ開発銀行）も「一帯一路」を実現するための資金を確保するためのものだと考えてよいだろう。

これに対し、日本が推し進めているのが、わたしが名付けた「ダイヤモンドの首飾り」戦略だ。安部総理は、「太平洋とインド洋をまたぐ国際海域が中国海軍の脅威の増大により貿易国家にとって必要不可欠な航行の自由は深刻な妨害を受けかねない懸念が生まれている」とし、「このまま放置はできずオーストラリア、インド、日本、米国ハワイによって、インド洋地域から西太平洋に広がる海洋権益を保護するダイヤモンドを形成する必要がある」と述べている。海上での影響力拡大に突き進む中国を牽制し、対中包囲網ともいえる「アジアの民主主義セキュリティダイヤモンド構」が日本の地政学的な戦略外交、国家戦略的な大戦略なの

だ。この戦略に沿って、安部総理は二〇一四年九月にバングラデシュを訪問した。五月にハシナ首相が訪日したことに對する答礼の意味もある。この時、安部総理は、「ベンガル湾産業成長地帯構想」を提案し、おおむね四〜五年間で約六千億円の経済協力を行う用意があると表明した。日本としてはかなりの大盤振る舞いだが、中国は「真珠の首飾り」戦略の一環として、バングラデシュの最大の港・チッタゴンでコンテナや石油関連施設の整備の支援をしており、それに横やりを入れる意味が濃厚だ。

現代地政学の開祖とされる英国のハルフォード・マッキンダーは「人類の歴史はランドパワーとシーパワーの闘争の繰り返しである」と述べている。ランドパワーとは「国家が保有する陸地を利用するための潜在的かつ顕在的な能力の総称」、シーパワーとは「国家が海洋を支配して活用する能力の総称」である。現在の世界でいえばシーパワーの盟主は米国だが、中国は「一路」でシーパワーの主、米国へ挑もうとしているのだ。

インフラの質の比較 2011年

Country ranking ^a	Overall infrastructure						
	Electricity	Roads	Railroads	Ports	Air transport		
1 = extremely underdeveloped, 7 = extensive and efficient (by international standards)							
Bangladesh	129	2.8	1.6	2.9	2.5	3.4	3.5
China, People's Rep. of	69	4.2	5.5	4.4	4.6	4.5	4.6
India	86	3.8	3.1	3.4	4.4	3.9	4.7
Pakistan	109	3.5	2.2	3.7	2.8	4.1	4.3
Sri Lanka	48	4.7	5.0	4.5	3.8	4.9	4.9

^a Ranking out of 142 countries, 1 = best.

Source: 2011 World Economic Forum, *The Global Competitiveness Report 2011–2012*.

いま話題の南沙諸島の埋め立てやA—B（アジアインフラ投資銀行）の設立などもみなこの一環なのである。同じ海洋国家である日本も、これらの中国の動きを指をくわえて黙視しているわけにはいかないだろう。日本もシーパワーの国なのである。

このように東西両陣営ともバングラデシュを「戦略的パートナー」にしたいの



である。この地政学的な地位を、バングラデシュがうまく利用すれば、これからの経済成長に大いに役立てることができらるだろう。

バングラデシュが豊かになる可能性を秘めた国であると、わたしが考える理由

を、農産物や水産物の豊かさ、人口規模と人口構成、地政学的な有利さの三点から述べてきた。

最後に付け加えるとすれば、バングラデシュの人たちの目の輝きだ。わたしはバングラデシュで多くの人に出会った。日本人の目から見れば、いずれも貧しい生活を強いられている人たちが多かったが、それに打ちひしがれている様子はまったく感じなかった。真剣なまなざしで黒板を見つめる生徒たち、高い勤労意欲が感じられる縫製工場の労働者たち、マイクロファイナンスを利用して自立しようとする女性たち、いずれもいきいきとして目を輝かせていた。スラムの住人でさえ希望を持ってるように見えた。

ほとんどのバングラデシュ人が、日本びいきなこともうれしかった。国籍不明の格好をしているわたしだから、一見するとマレーシア人とかネパール人とか思いう人も多かったようだ。しかし、日本人だと話すと、ほとんどの人が相好を崩し、「日本は良い国だ」と話しかけて来た。一番の理由は、トヨタ、ソニーやジュー



キ(工業用ミシン)など日本製の工業製品への信頼性が高いことだ。ODAなどを通じて、日本がバングラデシュへの最大の援助国であることを知っている人も多かった。なによりも、同じアジアの国として、日本が経済大国に発展したことに對する尊敬の念があるのだろう。

三週間という短い旅行期間で、わたしがバングラデシュの実態にどこまで迫れ

たか分からない。思い違いもあるに違いない。だが、わたしは間違ひなくこの国が、この国に生きる人たちが好きになった。

バングラデシュ国歌は、ノーベル文学賞の受賞者で詩人、思想家として有名なラピンドラナート・タゴール(1891-1941)の詩、「黄金のベンガル」がもとになっている。タゴールはその中で、バングラデシュが水と緑豊かな大地に恵まれていることを高々と詠っている。このささやかな紀行の最後に、タゴール作詞のバングラデシュ国家を紹介しておこう。

我が黄金のベンガルよ
私はあなたを愛します

いつもあなたの空、あなたの風が私の心に
笛の音を響かせます

母よ、早春にはあなたのマンゴー畑に香りが
満ち溢れます

なんとすばらしいことでしょう。

母よ、晩秋には豊かに稔ったあなたの大地
に私はなんと美しい微笑を見たこと
でしょう

なんと美しい景色

なんとさわやかな木陰

なんと豊かな愛情

なんと深い慈しみ

なんと美しい衣でパニヤン樹の下や川岸
を覆っているのでしょうか

母よ、あなたの口から出る言葉は、私の耳
に天の飲み物のようにやさしく響きます

なんとすばらしいことでしょう

母よ、あなたの顔に哀しみが拡がると、母

よ、私の目から涙が溢れてきます

「弘文堂・もっと知りたいバングラデシュ
より」

(注1)

この紀行は二〇一六年のもので、五年たった今は情勢が変化している可能性があります。

(注2)

二〇一八年一月三〇日に実施されたバングラデシュ総選挙は、与党のアワミ連盟(AL)がバングラデシュ民族主義党(BNP)に圧勝した。与党連合で95%を超える議席を獲得し、AL単体でも85%を占める。民主主義の復活を主張するBNPに対し、10年間の経済成長の実績を訴えたALが民意を得た結果だ。

ただ、投開票のあった一月三〇日は全土で与野党の支持者が衝突し、少なくとも18人が死亡、二百人以上が負傷するなど混乱が広がった。野党候補の1人が刺される事件も起きた。

(注3)

当時の為替レートは1バングラデシュタカ11・4円程度である。